園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年6月号

～異年齢保育～

保護者会へのご参加ありがとうございました。

●保護者会へのご参加、誠にありがとうございました。平日開催にも関わらず81家庭(全 95 家庭中)にご参加いただきました。また、ご夫婦で参加なさる家庭も年々増加傾向にあり、改めてお子さまの今と将来に対する保護者様の関心の高さに敬意と感謝の気持ちでいっぱいです。もちろん、われわれ保育者の責任の大きさに身の引き締まる思いです。今回お仕事の都合で参加が叶わなかった保護者の皆様には申し訳ありませんでした。後日行う保育参加や面談の中で内容について詳しくお伝えさせていただきます。



●さて、保護者会では、どのクラスでも集団、とりわけ異年齢のこども集団の中で生活と遊びの経験を重ねることの重要性についてお話させていただきました。「異年齢保育」は、ふかさわミル保育園が最もこだわりを持って取り組んでいる保育方法です。今なぜ「異年齢保育」なのか、年齢別保育とは何が違い、具体的にどのような場面で有効なのか。異年齢保育

研究の第一人者である藤森平司氏（保育環境研究所ギビングツリー代表）の著書『保育の起源』（世界文化社）を紐解き、これらの問いに答えていきたいと思います。

なぜ今、「異年齢保育」なのか

●「世界の学校では同年齢の子どもだけでクラスをつくって授業をする国は少ない」と言ったら、皆さんどのようにお感じになるでしょうか。日本で生まれ育った私のような人間にはつい「それ本当？」と思ってしまいます。4月生まれから3月生まれの子どもを一つの集団とみなし、画一的に同じことをさせようとする「年齢別」の教育・保育が日本ではまだまだ一般的のように感じます。しかし、世界的に見ればこのような「年齢別クラス編成」はどうやら少数派のようなのです。同年齢の保育について藤森氏は著書の中で次のように述べています。

●長い目で考えてみると、人類が生まれ、学習し始めてから、ずっと同年齢の中で学んだことはなかったのです。日本でも江戸時代以前までは、寺子屋や塾に代表されるように子どもが自分の意思で好きな時に学んでいて、そこに入る時期は必ずしも年齢によって決まっていませんでした。それが明治になって、国力を増すような人づくりをするために、ある事柄を覚えるための教育をしようとしたとき、その一番効率的な方法が同年齢を集めて授業をするような今の形だったのです。

●要するに、明治時代に日本が欧米による植民地化の脅威に晒されている中で国を守るために生み出された教育スキームが「学制」や「義務教育」であり、そこでは国家の近代化に必要な認知的な知識技能を一度に多くの国民に対し効率よ

く教え込む上で好都合だったという歴史的な事情があったわけです。

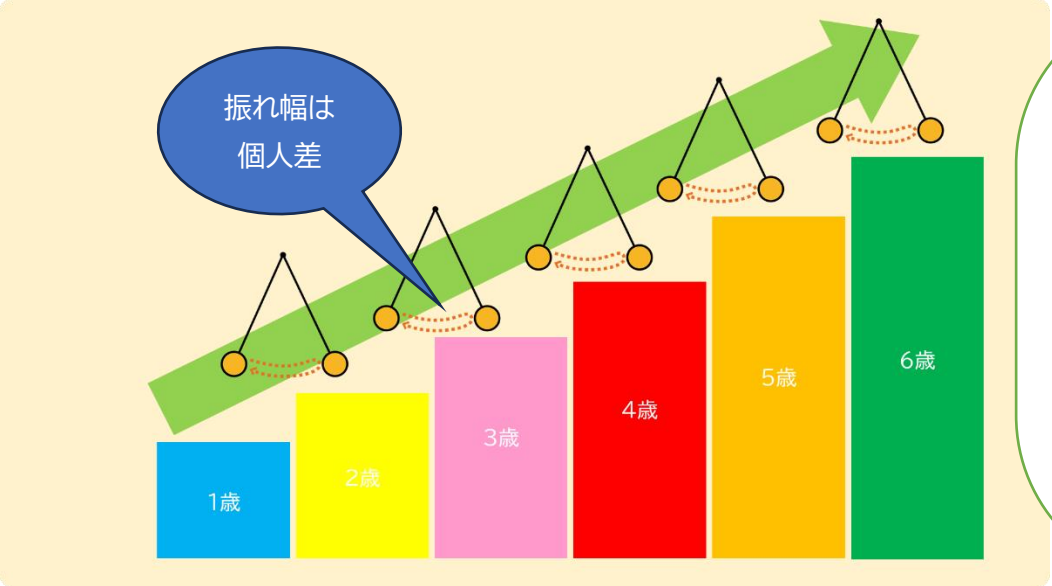
●しかし、時代は大きく変わりました。とりわけ最近では人類の認知的スキルはAIによって次々と代替可能となり、世界はもとより日本においても、教育の目的の主眼は、知識・スキルを教え込むこと（teaching）から人間を人間たらしめる非認知能力を引き出す支援（coaching）にシフトしています。この点について再び藤森氏の見解を引用します。

●教育の課題が、認知的なものを与えることから発達を助長することに変わってきたことに伴い、「指導」することから「援助」することに変わってきました。これは大人になったときに必要な力が、科学が進むにつれて変化を遂げてきたからです。また、最近の青少年の事件やいじめ、自殺などから教育の課題が見えて来たということもあります。

●このように教育の課題が従来の教科指導から発達の援助に変化しつつある現在においては、年齢別クラスでは不都合な局面が生じてきます。それは以下のような人間の発達過程の性質に原因があるのだと、藤森氏は指摘します。

●発達は時間的経過の中で生じ、その発達は、普遍性、方向性、順序性を持つと言われます。例えば「おすわり→つかまり立ち→ハイハイ→伝い歩き→ひとり歩き」という順序はほぼ一定で、その成立の時期もほぼ同じ頃です。（中略）その他に注目されているものに「連続性」があります。発達は、連続しているということです。もちろん、それは直線的に上っていくような連続ではなく、行きつ戻りつしながら進みますが、それでも連続してある方向に向かっていきます。私たちが、子

どもの発達を促し、援助しようとするときには、この連続性をきちんと押さえなければなりません。その場合、その子は今何歳だからこのような発達過程にあるということは一つの目安として言えるだけで、個人差は大きくなります。



＜発達の連続性＞
短期的には振り子のように進んだり戻ったりするが、長い目でみると一定の方向性に伸びている

注：図はあくまで藤森氏の見解に対する橋本の理解です。

●ここでのキーワードは「個人差」です。すなわち、子どもの発達過程には、ある程度年齢ごとの共通性・普遍性が見られるものの、それはあくまで目安に過ぎず、発達の連続性には個人差があり、一人ひとり違うということです。過去においては年齢による習熟度と思い込んでいたものを当然あるべき「個人差」として捉えることで、**年齢別保育よりも幅広くて柔軟な（異年齢保育の）枠組みの中で、その子に合ったことを、その子にあったやり方で援助する**ことが容認されます。そうすることで、その子の意欲や好奇心、集中力を高め、個性を良い方向に伸ばすことができるようになるのです。前回のコラム（5月号）でお伝えした園名の由来にあるように、子ども一人ひとりの個性をしっかり見きわめ、生かすことを目指すふかさわミル保育園が「異年齢保育」にこだわる理由がここにあります。

●OECD（経済協力開発機構）が 2006 年に発行した保育白書『Starting Strong（人生の始まりこそ力強く）Ⅱ』の中でも、「子どもたちすべては、あらかじめ特定された知識や習熟度を達成することよりもむしろ、学習に対する意欲と好奇心、学習における自信を高めていくべきである」とあり、知識の習得よりも（とりわけ非認知能力の）発達の援助の重要性が謳われているのも、同じ趣旨に基づくものではないかと考えます。

異年齢保育が有効な保育の場面

●次に、異年齢保育が一人ひとりの発達支援に有効な3つの場面を紹介します。ここでのポイントは、適切な子ども集団の異年齢構成は、「保育のねらい」に応じて自ずと変わってくるという点です。

① 習熟度別保育における異年齢

一人ひとりが今よりもできるようになることを目指す保育場面においては、月齢ではなく発達の近しい者同士で異年齢集団を構成します。ただし、この場合、保育者の方で個々の子どもを習熟度によりランク付けするのではなく、子どもが自分でどれをやるかを選べるような環境を設定します。例えばふかさわミル保育園の「絵画デー」では、ハサミを使った飾りを作る場合でも、直線切りでつくるもの、曲線切りで作るもの、形切りで作るもの、課題を複数用意し、それぞれを子どもたちに提案し、選んでもらうようにしています。そうすることで、自ずと年齢別ではない発達の近しい者同士の集団が出来上がるのです。

② 模倣相手としての異年齢

「学ぶ」の語源が「真似ぶ」から来ているように、人間には**「見て、真似て、学ぶ」**という特徴があります。保育園の生活の中で模倣が生まれやすいのは、**自分より少し上の年齢の子**が自分にとって興味・関心があることに取り組んでいるような場面です。例えばふかさわミル保育園の0・1 歳児クラスの間にはもともと壁がないのですが、これを大きく3つの空間に分けることがあります。一つは伝い歩きまでの子が過ごすスペース、もう一つは活発に歩き始めた子がじっと座って何かに取り組むことができる静的スペース、そして、活発に動きまわることのできる動的スペースです。それぞれのスペースは、子どもたちがそれぞれ違った行動をする子たちを見て真似することができるように、また、見られていることがわかるように、視界を遮らない仕切りを作ります。

また食事でも、1 歳児クラスの子どもが食事をする場所から、2 歳児クラスのランチルームが見えるような配置になっているのも、こうした模倣が行われるための工夫の一つです。

③ 教え、教わり、やってあげ、やってもらう異年齢

人間には生まれながらに他者を援助しようとする気持ちが備わっています。保育園では、例えば泣いている 0 歳児クラスの子の頭をなでて泣き止ませようとする 1 歳児や、園庭に出るための靴を履かせてあげようとする 2 歳児のような、美しく微笑ましい子どもの姿をよく目にすることがあります。その持って生まれた力を人との関わりの中で生かし、数多く経験することが、個人の**思いやりや社会性**を育てる上で大切だと考えています。こうした関係は、**明らかに発達の違う子同士の関係**から始める方が、よりスムーズに受け入れやすく

なります。同年齢の中だけで行うと、それは優劣の判断になりかねないからです。ふかさわミル保育園では、5 歳児クラスの子が乳児の部屋にお手伝いに行く日が設けられます。年上の子は年下の子をおもいやり、年下の子は年上の子に憧れの気持ちを持つなど、お互いに刺激し合って成長を促す効果が期待できます。

脳科学から考える異年齢保育の有効性

●以上、一人ひとりの子どもの発達を促す上での異年齢の有効性について見てきましたが、最近の脳科学研究によっても、前頭葉の発達と異年齢保育との関連性が分かってきたそうです。以下再び藤森氏の著書からの引用です。

●最近、脳の研究が進んでいます。その中で特に注目されているのが、前頭葉、特に前頭前野と呼ばれる部位の人間特有の脳の働きです。人間の他には、どんな動物にも、どんな機械にも代わることのできない人間としての機能を司っている部分です。今後、この部分の働きを促すことが、教育の主な目的になるのではないかということさえ言われています。（中略）どのような場面で子どもたちはこの部分を使っているのかという研究から、「異年齢児との触れ合い」が前頭葉の発達に有効であることが分かりました。（中略）さまざまなものごとの工夫は前頭葉の働きを促します。それが子どもたちの中では、遊びの中で多く行われます。特に異年齢児で一緒に過ごす時ほど工夫が必要になるのです。そういう意味では、遊びと生活の両方の場面において異年齢児と過ごすことは、従来からいわれている社会性や思いやりが育つという効果の他に、脳の発達における効果も注目されてきているのです。

●いかがでしたでしょうか。異年齢保育とは、単に異なる年齢の子どもを一緒の場所で保育したり、特定の年齢幅を設定し固定するのではなく、さまざまな状況や保育のねらいに応じて適切な形態を選択し、柔軟な展開を工夫することだということが伝わっていれば幸いです。それと同時にそこに関わる保育士の在り方、具体的には子どもの心情に対する深い洞察とこまやかな心配りにも、われわれ保育者は心がけていかなければなりません。

●育児や保育や教育は、将来への投資です。今すぐ結果が出るとは限りません。しかし、だからこそ、きちんとした専門性から、将来への見通しを持って、子どもにとって必要な場や環境を提供していくことが必要となっているのです。

●この保育者の専門性について、今後も職員一丸となって研鑽を続けていかなければならないと考えています



園長　橋本　英明